
コント「MAD軍曹」三十六某

ジェイのすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コント「MAD軍曹」三十六某

【Nコード】

N9364L

【作者名】

ジェイのすけ

【あらすじ】

「松戸博士の発明はなんでそんなにくだらない物ばかりなんですか。てへ」の巻

1「心をサバにはいけない？」

その一

松戸博士ことマッド軍曹と呼ばれる発明好きの博士は、はげつる頭でカイゼル髭が特徴的だ。

そんな彼はちよっぴりおしゃまで、ちよっぴりセンチなマッドサイエンティストなのである。

「ちよつと、向島君。こっちにきてちようだい」

「なんです、先生？」

向島君とは、博士が若いときから発明で得たパテント料を基に、たくさんのお金を引き取って育て上げた子供たちのうちの長兄である。つまり彼は、マッド軍曹の養子にして一番弟子ののである。

「新しい発明品が出来上がったんだけど、ちよつと見てくれない？」

「ええ！？」

「あら、なによ。随分いやそうね」

「あ、いやその、だって……」

「なによ」

「だってボクには、これから世の中におけるたくさんのお金迷えるボロボロになった子羊のような人々の疲弊しきったハートを驚嘆みにして、陶酔的かつ熱狂的にさせるような、とろろででろんでの究極ファンタジー小説を世に送り出すという崇高かつ超合法的なおびただしい使命が待っているわけで……」

「この、イカレポンチ！」

博士は向島君のみぞおちに一撃、熱い拳をめり込ませた。

「なによそれ、あんたの目は三日前に西友の特売品コーナーの隅で寂しく売れ残っていた高知県産のごま鯖みたいにどんなに値を下げ

たつて手を差し伸ばされないぐらいどんよりと濁ってるわ！　いつからそんな既得権益に憧れを抱く小賢しいオイルダラーな陰鬱少年になり下がってしまったのよ？　ちゃっちゃんと目を覚ましてこつちを手伝いなさいな、まったくもう！　それよりきちんと世界を完全支配するぐらいの揺るぎない気持ちで発明をして稼いだ方が堅実的なよ。育ての親として、ボクちゃんそんなのゆるさないんだからあ！」

松戸博士ことマッド軍曹は、向島君の縮こまった背中を、電気肩たたき機のやうにぽかぽかとやつた。

「わ、わ、せんせ……先生。痛い痛いですよ。分かりました、分かりましたよ。付き合えばいいのですね。……それより、地の文が一部旧かなづかいなのはどういうわけですか？」

「知らないわよ、そんなの。作者ちゃんにでも訊いてちょうだい」

てなわけで、毎度とばけたやり取りをするこの義理親子は、これから養父が創り出した発明品を試そうというわけである。

「ねえ、先生。ところで今度の発明ってなんですか？　またこの間みたいに、世界を支配するために必要な高分子吸収シート理論を応用したという、塩辛のピンク色したドロドロの部分を混合圧縮利用した無限チカラが発動する動力源……なんてものだったらいやですよ。あの実験の後、三ヶ月以上すべてのごはんとおやつがイカの塩辛と、かつをの酒盗で埋め尽くされたんですからね。おかげで目に關しては丈夫になったけど、血圧が常時百五十を越えてしまったんですからね。あれ以来、クラスの中で“お前の死因は絶対に腹上死だ”なんてからかわれたりするんですよ」

「もう、向島君たら……。あんたのクラスメイトはどんだけおっさん臭いのよ。いいからそんなかわいらしい誹謗中傷は放っておいて、ボクちゃんの発明をとくとその目で見てみんしゃい」

そしてマッド軍曹が差し出したのは、手のひらサイズの円筒形の容器だった。

つ
づ
く

2「悪魔のベルなら、鈴を鳴らしてりゃいいんだよ」

その二

「何です博士、そのホームセンターの見切り品のどこのメーカーかもわかんないバツタ品のようなハンドクリーム状の物体は？」

向島君の質問に、博士はギリリと鋭い目を輝かせ、有無も言わさない速さで答えた。

「これはね、透明クリームよ」

「とうめいクリーム？」

透明クリーム――？

向島君は、ぐるぐると頭ん中を回転させた。まったく先生ときたら、またこんなくだないもん作っちゃって。だからせつかく沢山儲けたパテント料も核爆発のように一瞬にして浪費してしまうんだよ、なんて考えてしまったのだ。だが……透明クリームなどという直接的で一本やりなネーミングで解かる通り、それについては一切突っ込もうとはしなかった。

確かに今どきの商品は、ふわとろだとか、うまうまだとか、幼稚園児でも分かり易い赤ちゃん言葉のような商品名表記が一般的だが、これほどあまりにも直接的なネーミングであると、作者のセンスが問われるというものだ、と思わざるを得ない向島君なのである。

だがしかし！

それでも理解不能な読者諸君がおられることが予想されるので、あえて説明しよう。

透明クリームとは、そのクリームを対象物に塗ると、一定時間だけ物体が透明になるという、いかにもアレな、アレアイテムなのである。これは、地元特産品をいかに効率良く売ろうかと曰ころから四苦八苦している地産地消井戸端会議議連ザビ会長も子供ころから

夢を見るほど懂れた、究極のひと品なのである。

なに？ アレじゃ解かんないって？ そんなのそれなりに理解しなさい！

……てなわけで話を戻すが、博士と向島君の間には一瞬凍りついた空気が張り巡らされたのである。

「なによ。何か文句あるの？」

「だって先生……またこんなものですか？」

向島君は、アゴに力が入らない様子である。

「あら、なによー！ 向島君たら、随分変な目で見てくれたりなんかしちゃってくれるじゃないのよーっ！」

「だって先生……。いまさら“透明クリーム”だなんて、どんな子供向けフィクションの小道具にだって使いませんよ。僕の書いたミステリー小説にだって登場してません。……またどうせ、それを体中に塗りまくって、女風呂に潜入しようなんて考えてるんじゃないんですか？」

「なにいつちゃってるのよー！ もう、心外だわ。ボクちゃんがそんな少年マンガの主人公みたいな品性下劣な目的でこれを作ったとしてもおもっているわけ？ この歳になって、悪魔のベルやこだまちゃん裸なんて見たくないわよー！ しどい、しどすぎる……」

松戸博士ことマッド軍曹はシワシワの白衣のポケットからハンカチを取り出し、いきなり正座したかと思うと、とても優しくそんな中年女性が微笑んでいる写真立てに向き合いながら、チーンと鐘を鳴らして泣き叫んだのである。お線香のかほりがほのかに漂う。

「ああ、天国にいる絹子や、ボクちゃんにとってもくじけそうよ。だって、だってだってボクちゃんね、今まで一生懸命この子達を良い子に育ててきたつもりなのよ。でもね、でもでもね、やっぱり反抗期には勝てないわ。ああ、志し半ばにして旅立ってしまった絹子……どうしてアンタはボクちゃんを置いて天国に行ってしまったの……」

博士はおいおい泣いた。辺りは塩水だらけである。

「わ、わ、わかりましたよ先生、もう……。先生の発明はとても良い発明ですって。かなわないなあ。いつもいつも話がこじれると、毎度毎度絹子お母さんに泣き付かれてしまっちゃあ……」

「じゃ、じゃあさ、さっそく実験台になってくれる？」

「ええーっ!？」

つづく

3 「すまんが、みんなのイノキをくれ」

その三

松戸博士ことマッド軍曹は、研究室の壁際のボタンをポチッと押した。

するとなにやらニョロニョロした何本もの触手のようなものが少年の体を覆いつくし、ベッド状の実験台の上へと運び去った。

「わーわーやめてー！　せんせ、せんせい！」

向島君は懸命にもがくが、もがけばもがくほど体が言う事を聞かなくなる。触手がまだいたいけな少年の柔肌に食い込む食い込む食い込んでゆく。なんと！　一本の触手が向島君の半ズボンの脇から入り込もうとしている。こ、これは……これはどうということなのであるうか？

ああ、彼はこのまま変態マッドサイエンティストの餌食になってしまうのだろうか？

さあどうなる向島君！　あやうし向島君！　君の貞操は……はがっ！！

「何やつちゃってるのよ、このバカ作者！　うちの可愛い息子になにやつちゃってくれてんの！？　ボクちゃんがそんなことするはずないでしょう？　向島君はこのボクちゃんが手塩にかけて育てた可愛い息子なのよ。変なことしないでよっ！」

たはは……怒られてしまった。

松戸博士は作者の僕に向かって歯をむき出しにして威嚇しています。なんだか作者のこの僕がその昔、旅に出ていた時に会った奇人変人のオバサンに包丁を突き出されて本気で殺されかけたときのような凄まじい怨念と恐怖が感じられます。本気で殺されかけた事がある読者諸君なら、少しはお解かりになりますよね。

そうです、そんなかんじなので、ここでおふざけは一旦やめにし

ましょう。

どっちみち、作者にそっち系の趣味があるわけじゃないから、途中でやめるつもりでしたけど……。

とはいうものの、

「ガルルル……」

マッド軍曹はそんな作者のいいわけに、少しも耳を貸そうとしないようなので、謝ります。ごめんなさい。

……というわけで、ウオホン。

これを読んでいる諸君は、いったいこの作者は何をしたいのか分からない、とお思いでしょうが、しばしこのままお付き合いください。

といふのも、今日の昼間に作者は少しばかり困った目に遭ってしまつてテンションが下がり気味なのであります。

なんてことはおいといて、さつさと劇を再開しましょう――

「うわぁーっ、先生！いきなり何をするんですか!？」

マッド軍曹こと松戸博士は、左手に持った筒状の容器のふたを開け、でろんでろんのゲル状になった透明クリームを右手五本指でたつぷりとすくい出すと、向島君にむけてそれを塗りたくろうとした。すると、

「ギャーッ」

向島君は天と地が引っくり返るほどの大きな悲鳴を上げた。

「ひいっ!」

向島君が、耳をつんざくような大声を張り上げるものだから、松戸博士も驚いて引っくり返ってしまった。と、するとなんと、博士は引っくり返った同時に持っていた容器を放り投げてしまい、それが真上から落ちてきて、あれまなんと、頭からそのクリームをたっぷりと被ってしまったのである。

それを見た向島君は、またまた発狂（放送禁止語句）はなはだしい金切り声をあげて、とうとう失神してしまったのである。

「わ、わ、わ、向島君だいじょうぶ？　ねえ向島君！？」

松戸博士は何が起こったのかわけが分からず向島君を揺り起こそうとしたが、やがて自分の顔が研究室の鏡に映ったのを見て、

「ぎゃーっ！！」

と大声をあげて、同じように失神してしまったのである。

つづく

4「夜空の星が輝く陰で、ワルの笑いがこだまちゃん」

その四

「先生、洒落になりませんよ」

向島君はうな垂れながら溜め息をついた。

「そうね、これはもう駄作に違いないわよね」

松戸博士ことマッド軍曹もそれにならったかのように深いため息をついた。

そして作者もついでに溜め息をつく……。

もちろんのこと駄作と言っても、このコント小説の事を示唆しているのではない。松戸博士の新作、透明クリームのことを言っちゃっているわけなのである。多分。ふう。

なんだか彼らは妙に辛気臭い。当然といえば当然である。なにせ、数十分前にあんなことがあったのだから。

向島君は、重くなった舌によくムチ打って口を開いた。

「ねえ先生、なんであんなもの作ったんですか？」

彼の表情からは精気が感じられない。

「あんなものって……向島君。それを言っちゃお終いだわよ」

そう言いつつも、松戸博士もかなりの落胆ぶりである。

それはそうだ、そうなのだ。松戸博士ことマッド軍曹と、向島君は先ほどの騒ぎで「透明クリーム」の特性について思う存分に理解を深めてしまったからなのである。

「ボクちゃんが自分で作つといてなんだけど、まさかねえ、透明クリームがあんな風なものだとはねえ」

「ええ……」

向島君は一度目をつむり、先ほどのことを思い出すと、ぶるぶるっと体を震わせて自分を抱きしめるように、

「さすがに“透明クリーム”というからには、体中のすべてがこの

世から無くなってしまうたかのように消えて見えなくなるのだと思
っていたら、まさか……」

「透明クリームを塗った表面だけ透けてなくなる……だなんて、作
ったボクちゃんも考えてもみやしなかったわ」

「おかげで僕は、血管と骨と筋肉繊維で覆われた、おぞましいリア
ル人体標本を目の当たりにしてしまったのですからね……」

向島君はまた、ぶるぶるっと身をすくませた。

「最初、先生が僕にクリームを塗ろうとしたとき、先生はクリーム
を素手ですくい上げたものだから、手の表面が透けてしまって……
僕にとって、一生忘れることのないトラウマ映像です」

「ごめんね向島君。ましてアレを頭から被っちゃったりなんかしち
ゃったら、リアル目玉おやじの出来上がりですものね。さすがのボ
クちゃんさえ、一瞬気が違えてしまったわ」

彼ら親子の間には、先ほどまでのどれくらいテンションの形跡もみ
られなかった。

実を言うと、真面目な向島君でさえ透明クリームを塗りさえすれ
ば、誰にも気づかれずに女湯に忍び込むことは可能だ、と密かに淡
い期待を抱いていたのだから。健康的な男子であれば、必ず持ち得
るドウリーミーなクリーミーであったことは間違いないのだ。

ああそれなのに、それなのに……

そんな淡い希望でさえ儚い夢幻のごとく消え去ってしまったのだ
から、少年の落胆ぶりといったらこれ、筆舌に尽くしがたい苦悩が
垣間見られるというものだ。

だがここで、一筋の光明が差ししてくる。

「だけど先生。この発明ってすごいですよね。だって、クリームを
塗った場所が透けて見えてくるなら」

向島君の顔が、花が咲いたようにパツと明るくなり、「開腹手術
ができない人の体の中を調べたり出来るんじゃないですか？」

そこで博士も納得したように、

「そうね、そういうことなら使えそうね。体の深部までは今のクリ

ームのポテンシャルでは難しそうだけど、それなら何とか商品として売り出せそうね」

なにやらこの親子の瞳の色が、銭、銭、銭、で染まってきたようである。

「分かったわ向島君。それなら、これから透明クリームの改良を模索してゆけば、ビッグビジネスのチャンスも生まれてくるというわけね」

「そうですよ先生！ その意気ですよ先生！ それでこそ僕のお父さんだ」

なんともこの親子。なにやら妖しげなものにとり憑かれてしまったようである。

だが……

「それより向島君。この試作品はどうしようかしら」

「ええ？ そんなの失敗作として、いつもの失敗作専用納戸にしまっておけばよろしいじゃないですか」

彼はさらりと答えた。が、

「それがダメなのよ」

「え、どうしてです？」

「だって……」

博士はそう言って、広い研究室の壁際のボタンを押した。すると途端に壁自体が観音開きなつて左右に放たれると、なんとそこには！

「わ、わ、わ！ 先生なんなんですか、この大量の透明クリームの在庫は！」

そうなのである。松戸博士ことマッド軍曹は先行量産型と称し、何も考えなしに透明クリームのプロトタイプを山のように生産してしまっていたのである。

「どうするんですか先生。こんなに欠陥だらけの失敗作を作ってしまったって……」

「あら、向島君。血管が透けて見えるだけに欠陥だらけとは、少年のわりに洒落たことを言うじゃない」

「うんもつつ！ そんな変な突っ込みは置いといて、これどうするんですか!？」

「決まっているでしょう？ これから街に出て売り込みに行くのよ。だって……」

「だって？」

「だって、売れると思って試作品に全財産をつぎ込んでしまったんですもの。てへ」

さて、彼らの運命はどうなってしまうのであろうか。

つつく

5「たった一つの命を捨てて、生まれ変わったふらちな悪行三昧」

その五

神奈川県Y市郊外の、とある小さなみずばらしい駅の階段に、カ
ツンカツンと疲弊感を漂わせる足音が響き渡っている。その足音の
持ち主は、人っ子一人いない駅の構内をよほどかつたるそうに降り
てくる。どうやら仕事帰りのOLのようだ。

日ごろから欠かさない丁寧なスキンケアは、彼女の若さ溢れる張
りのある肌を象徴してはいるが、どうやらこんな時間帯になつてし
まえばしまうほど、その労力の無意味さを主張してしまっている。

しかし、彼女の豊満かつ引き締まった滑らかなボディは、彼女を
優しく包むブランド物の上下をこれでもか、というぐらい酷使して
いる。なにせ、そんな纏い物の間から湧き出でる妙齡の女性からの
み漂う熟れた果実にも似た体臭は、どんな獰猛な雄牛をも一撃であ
の世へと送り込んでしまうのではないか、という危険性を示唆して
いるのだ。

「あんもうつ！ 課長がいきなり残業押し付けるもんだから、とう
とう終電で帰ってくるハメになっちゃったわ。せつかく今夜はワー
ルドBカップの日本対ソヴィエトの試合を肴に一杯やろうと楽しみ
にしていたのになあ」

彼女はそんな愚痴をつぶやきながら、駅の東側出口を抜け、昼間
に散々強い日差しを浴びせられたアスファルトの歩道に片足を下ろ
す。もう、駅前の売店の陳列棚は、シャッターでかたく閉ざされて
いる。

「あたりまえよね、こんな時間だもん」

彼女はそうつぶやきながら、静まり返った駅前商店街の方向に足を向け、すたすたと歩みを進める。すると、

ぶっ――。

という音とともに彼女はハツとし、顔を赤らめ、辺りをキョロキョロと見回す。

「ホントやだもう、くっさー。出物腫れ物ところ構わずね。こんな密閉空間でもないところなのに、自分の鼻先にまで臭って来るわ。昨日休みだったからって調子に乗ってお芋を沢山食べたせいね。最近スーパーで焼き芋なんか売ってるから悪いのよ、もうっ！さっきまで電車の中で我慢してたからね、つい……。これで電車の中だったら、乗客はみんな窒息死寸前よ。ヘタすれば、あらぬテロリストの容疑を受けて囚人の仲間入りになっちゃったかもね……。なあんで、わたししたらバカね、てへっ」

と、彼女は自分の頭を軽く小突きながら、

「それにしても、今の誰にも聞こえてなかったわよね……」

などと一人ポケー人ツツコミを行っていた、その瞬間である。

「お、お、おお、おねえさん……」

彼女の後ろから声を掛けて来る者があつた。

彼女は心臓が飛び出るかと思うほど驚愕し、思わず歩みを止めてしまった。彼女は恥ずかしさと恐怖が一体になりパニックを起こしそうになったが、やがて興味本位が先に立ち、恐る恐る後ろを振り返ると、

「お、おねえさん、クリームを、かかか、か、買ってくださいませんか……？」

なんと可愛い白黒ネコの着ぐるみを着た小学生ぐらいの男の子が立っていた。

「いやーん、かわいい！」

彼女は、思わず胸がきゅんとなって、途端にその男の子を抱きしめてしまった。

「むぎゅー！ お、お、おねえさん、く、苦しいです……」

彼女の凹凸の利いた肢体の表面が、少年の鼻先から口元辺りを席卷する。彼女の香水と汗の入り混じった体臭が少年の心身を覆いつくす。

その時である。

「ヘイ！ そのチャンネエ（訳：ねえちゃん）。うちの息子にナニスルデスカー？」

そこへ割って入ったのは、はげつる頭にカイゼル髭が特徴的な、なんとも怪しげな感じの中年のおっさんである。彼は、黒革の上下に、真夜中にもかかわらずサングラスといういでたちである。

「あ、あなたは……？」

「ボクちゃんは、この着ぐるみネコ少年の父親よ。たった今、あなたはウチの可愛い息子に色仕掛けしちゃったわね、しちゃったわよ、いいえ、いいえ、しちゃったのよ。とぼけてもムダよ。今のアナタが犯したふらちな場面の一部始終を、この高性能デジタルビデオカメラに収めたんだからね。ついでに言えば、アナタの毒ガステロリズムの場面までもね」

怪しい男は不敵な笑みを浮かべながら、妙にオカマっぽい口調で言い放った。

「な、な、な、なんですってえーっ!？」

彼女は顔を真っ赤にして驚いている。

そして怪しい男は、カメラを何度も何度もいやらしい目で覗き込みながら、

「これをユーチュー。なんかの動画サイトに掲載されなくなかったら」

と彼女に問いかけた。彼女もそれに呼応するかのようになかったら

「ボクちゃんの可愛い息子が持っている特殊なクリームを、一個いい、いいいい、一千万円で買いなさい」

「なんですってえーっ!？」

彼女は突飛な声を張り上げた。すると、

「こらーっ！　そこで何やっている！　抵抗するとタイホしゅぞ！」

と、紺色の上下を着た制服警官らしき影がこちらに向かってくる。
「おまわりさん！　助けてください！　わたし変な人にかまれてまーす！」

女性は真夜中にもかかわらず、形振り構わない大声を上げて助けを呼んだ。

「ち、まずいわ！　向島君、ここは一旦退散よ」

「は、はひっ！」

そう言葉を発すると、黒革の上下を着たカイゼル髭の怪しい男と、ネコの着ぐるみを着た少年は、一目散にその場から消え去ったのであった。

これは後日談だが、ここ数日間でこのような事件が数十件ほど起きていることが分かった。しかし、実際には金銭的な被害があるわけでもなく、すべてが未遂で終わっているのも、新聞やテレビ等のマスコミ云々に大きく取り上げられることはなかったという。

だが、確実にこのような妙ちくりんな噂はあらぬ噂を呼び、都市伝説の類いへと発展してゆくのは世の習いともいうべきだろう。

そして、

「あのヘンテコな犯人は、毒ガスを持っている可能性もあるかも」
などと、話の尾ひれが付いて回っているのは、多分あの女性の謀略的な入れ知恵によるものと誰が知ろう。

——ナショナル・アホ・グラフィック刊『驚愕！　俺の七不思議——
あなたも知らない世界のバカの塀編』より抜粋。

つづく？

6 最終回「あの子が売っていた、真っ赤なスカンク」

その六

「先生。あの記事読みました？」

今年小学六年生になったばかりの向島君は、養父である松戸博士に一冊の本を差し出した。

その本とは、昨今超ミリオンセラーとして世を騒がすあの名著『驚愕！ 俺の七不思議』シリーズである。これは昨日、ちよっぴりおませでちよっぴりエツチなクラスメイトの、バンディ穴戸君（柔道家）に貸してもらったのである。バンディ君と向島君はとても仲が良いらしい。

それはともかく……

その記事の内容の一つに、『あの事件』の内容が面白おかしく書かれてある。無論、博士と向島君が行った夜の営業活動についての事だ。

「ねえ先生。この本の中では、なんだか僕たちすごい奇人変人のようにあつかわれてますよね」

「そうねえ、ボクちゃんは今さら白いギターなんか欲しいわけじゃないのにねえ」

「白いギターってなんのことです先生？ それよりなにより『みなしごハウス』では、明日食べるお米も底をついてしまつて。ハウスの弟や妹たちも不安がつてますよ」

「あらあ、それは大変ねえ。ここんと今夜は出ずっぱりだったから、あの子たちの面倒を見る暇がなくなつて……困つたわ」

松戸博士が、みなしごを引き取って自らの養子養女にした子供たちは、長兄の向島君を含め総勢十二人いる。

上は小学六年生の向島君から始まり、一番下は幼稚園の年長組になったばかりの詩織ちゃんという感じで、みな食べ盛りの子供たち

ばかりなのである。

マッド軍曹の研究室と古くなった公民館跡を払い下げて買い取った「みなしごハウス」はすぐ目と鼻の先にあるが、ここんところの彼らの営業活動のおかげでみなが寝静まったところに帰るハメになっている。

「そうねえ、どうしようかしらねえ……」

そういつつも、マッド軍曹は黒革の上下に身を包み、角度の利いたサングラスをキめるのである。

「せ、先生！ 今日もこれでやるんですか？ もうやめましょうよ。最近なんだか警察の見回りもきびしくなっちゃったことだし、何か違う手を考えましょうよ」

「違う手ですって？」

「そうです。何かお金を稼ぐ方法を別に考えて見ましょうよ」

てなわけで、二人はない脳みそをこねくりまわして、ああでもない、こうでもない、と精一杯使ってみたものの、

「うーん、ボクちゃんたら発明に関しては天才だけど、物を売ったりするのはよく分からないわ。だから向島君、ここは一発虎の穴に修行にでも行ってきたくれる？」

「と、虎の穴ですか？ ていうか、僕にさんざんネコの着ぐるみを着せた上に、虎のマスクまでかぶらせるおつもりなんですか、先生」

向島君はちよつとぶんすか怒ってみた。

「あーら、向島君たら、そんなこと言っちゃってるわりに、寝るときにまでネコの着ぐるみつけてるし。だから今度はワンランク上を行って虎にしてみようかと思っただけだよ」

「せ、先生っ！」

向島君は途端に表情を真っ赤にし、

「ぼ、ぼ、ぼ、僕はそんな……ただ、弟や妹のためになんとかできないかと思っただけですよ！ へ、変なこと言わないでください！」

「あーら、そうかしら？ 向島君たら、毎晩きれいなおねえさんに

抱きつかれまくって、クセになっちゃったのかと」

「先生っ！」

向島君は、マッド軍曹の広い背中をぽかぽかとやった。松戸博士は嬉しそうに、

「いいのよ、向島君。ボクちゃんうれしいのよ。だって、真面目一本やりだった向島君があんな活き活きとして……そんなアナタを見ると、ボクちゃんなんだかもう……うつつ」

博士は急に泣き出してしまった。そんな博士を見てると向島君も、
「せ、先生。泣かないでください。先生が泣くと、僕も……うつつ」
彼ら親子は思わず肩を寄せ合った。
その時である。

「というわけで、今日は日曜日だからお昼から売りに行きましょう」
「ええーっ！」

てなことで、町に繰り出したるは二人の親子。無論様相など夜の営業活動のままである。

「せ、先生。真昼間からネコの着ぐるみは恥ずかしいですよ」

「あら、とつてもかわいいわよ」

「で、でも……」

「あら、うふふ。そうか、クラスのみよ子ちゃんに見られるのが恥ずかしいんだ？」

「せ、先生っ、それをどうして!？」

向島君は目の周りから耳たぶの後ろの方までポーツと真っ赤にした。

「あーらそんなこと、透明クリームなんか使わなくなってお見通しよ。ボクちゃん、伊達にアナタのお父さんしてるわけじゃないのよ」とかなんとか、ちよつと齒の浮くような会話をしながらやって来たのは、近くの商店街の外れにひっそりと構える公園である。

彼らは、それぞれの特殊なコスチュームにパンパンに詰め込まれた風呂敷包みを担いでここへやってきたわけだが、どうにも売り方

のきつかけがつかめず右往左往するばかりである。通りを過ぎる人々が二人を見るなり目をそらし、そそくさと逃げてゆく始末である。「これじゃやつぱり不審者そのものですよ先生……」

「そうね、このままじゃ夜やっているときと何ら変わらないわ。こは一念発起して、どーんと声を出して透明クリームをアピールしましょうよ。バナナの叩き売りみたいにな」

てなわけで、ここからはマッド軍曹の独壇場である。

「れでいーすえんどじえんとるまん。えーんどおとつあんおつかさん。さあさお立会いお立会い。ここにとりい出したるは“透明クリーム”と申すもの。透明といっても東京から名古屋をつなぐ高速道路のことじゃござんせん。クリームといってもレモンのことじゃありやせん。なにせ、この透明クリームはそんじょそこいらのクリームとはわけが違う。その薬効たるや一度つければアツと驚くほど効果が分かる。人によっちゃあ、アツてな声を張り上げすぎて、驚き勇んで引っくり返って粹なネエチャン立ちシヨンベン——」

といった感じで博士がやりだすと、行き交う人々がなんだなんだと押し寄せて、途端に公園が黒山の人だかりになった。

こうなれば占めたものとはかり、マッド軍曹はクリームの欠陥だの特性だのあまり語らず、ただ「塗った場所が透明になる」事だけを告げた。すると、

「買いまーす！」

と一人の体の大きな男が突然飛び出してきた。殉職寸前のラガー刑事か、若いときのサモ・ハン・キンポーに顔かたちが妙にそっくりである。

「おやつさん、それいかほど？」

「一個五万円なり！」

「そりゃないよ。もうひとこえ！」

「なら兄ちゃんの元気に免じて、二万円でどうだ！？」

「もうひとこえ！」

「ええい、もってけドロボウ！ ジャスト一万円だ！」

「買った！」

てなやり取りでその図体のでかい男が透明クリームを買ってゆくと、

「俺にもくれ！」

「俺も！」

「僕も！」

「わたしにも！」

といった具合で、およそ千五百個ばかりあったプロトタイプの透明クリームが一時間であっさり売り切れてしまったのである。

「す、すごかったですね先生」

「どう？ 向島君。少しはボクちゃんを見直した？」

「ええ、もちろんですよ。それにしても、どこでこんなテクニックを学んだんですか？」

「あら、学んだのではなく、ボクちゃんは心で商売をしたのよ」

「心……ですか？」

「そうよ。商人はね、詩人のようなものよ。ボクちゃんは商品売るのではなく、真心を込めた言葉を売ったの。世の中はそういう物を求めているのよ。ねえ、そうではなくて？ 向島君」

マツド軍曹は得意げに言い切った。しかし、

「なに真つ当な人生を送っている人みたいな事言ってるんですか！ 大体こんな怪しいブローカーみたいな格好をして言う台詞じゃありませんよ、先生！」

いたって冷静な向島君は、きびしいツツコミを入れる。

「なら白状するわ。向島君がまだ少年だからやんわりとした内容で終わらせようと思ったけど、そう言われると本音を言いたくなるわ。商売はね……」

「しょ、商売は……？」

「ぶっちゃけて言えば、商売は相手を。。。 (作者自粛) することが秘訣よ」

「ええーっ！」

こうやって少年の心は蝕まれてゆくのである。（うそ）

その後、近隣の銭湯や温泉施設において、数え切れぬほどの事件が起きたことは言うまでもない。ほとんどの事件の内容が、女性専用の更衣室やら浴場にリアル人体模型が多数押し寄せた、というものである。

みな、透明人間になるとすれば（本来はなれていないのだが）、同じことを思うようだ。

朝ご飯時に、彼ら親子はその事件の新聞記事を読みながら、

「もう、先生が、欠陥品だと言わないで売ったから……」

「これも生き延びるためよ」

「それにしても、リアル人体標本が鬼のような数で押し寄せた場面を想像すると、ゾッとしますね」

「そうね。我ながら罪悪感を覚えるわ。女性の裸を目の前にした人体標本……うう、血の流れや充血した箇所まではつきり見えちゃったりするんだから、それを目の当たりにした女の人たちはお気の毒だね」

「いっしょに見透かされちゃってますもんね、心の中まで」

終わり

6 最終回「あの子が売っていた、真っ赤なスキャンク」（後書き）

このようなくだらないお話を最後まで読んでくれて、ありがとうございました。

また、こんな感じの話を書きたいと思います。

では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9364/>

コント「MAD軍曹」三十六某

2011年7月30日03時21分発行